

イメージはいかにして生まれ、伝播し、体験されるのか

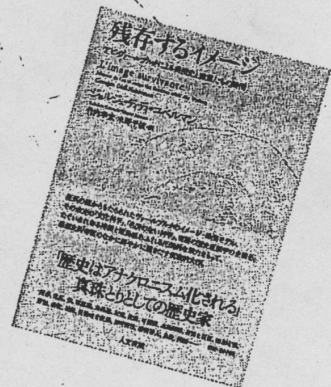
二十世紀の知的精神史の生態を骨太な輪郭で縦横に描く

稲賀繁美

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン 著
 竹内孝宏・水野千依 訳

▶残存するイメージ

アビ・ヴァールブルグによる美術史と幽霊たちの時間
 12・20刊 A5判774頁 本体9800円
 人文書院



イメージはいかにして生まれ、いかに伝播し、いかに体験されるのか。文学研究が文字宇宙の生態を把握すべき使命を負うならば、美術史という学問は、イメージの生態学であるべきにはなかったか。だが今日に至るまで、西洋の美術史研究では、この課題は忌避され回避されてきた。なぜならこの課題に正面から取り組むと、收拾不可能な混乱を招きいれることになるからだ。じつさい、ルネサンスの異教秘儀を説明しようとする、古代の亡霊が初りを跳梁するところになる。

その狂気を体験した稀有な人物として、近年アビ・ヴァールブルグ（一八六六—一九二九）に注目が集まっている。彼がヴァールブルグに集めた特異な図書館については、本邦では山口昌男の『本の神話学』がつとに注目した。近年では

進藤英樹訳『異教的ルネサンス』（ちくま学芸文庫：二〇〇二）ほか、現在、ありな書房より、伊藤博明・加藤哲弘編の著作集七巻の翻訳刊行も進行中だ。だがこうした再評価は追の疑問を招くだろう。いったいなぜ、彼の学術的な企ては、従来、正当な評価を得ることなく、ヨーロッパ学術の知性史から葬り去られてきたのか。ディディ＝ユベルマンの大著は、その謎解きに挑む。

だが、この作業は尋常一様ではない。まず本書の第一部、第二部からは、ブルクハルトの『生きた残滓』、タイラーの『生き残り』、ダーウィンの『表情の一般法則』、フィッシャーの『感情移入』、ニーチェの『永遠帰回』などに至る広範な理論的知見がヴァールブルグに収斂してゆく様子が再構成される。ヴァールブルクの営みのうちに堆積した知的地層と、それが蒙った褶曲や断層の様相が見えてくる。この錯綜した変成作用からヴァールブルグが導き出したもの、それが、『古代の残存』あるいは死後の生存（Nachleben）、「情念定型」（Pathosformel）として「症状」あるいは症候（symp-tome）としてのイメージという鍵概念だった。こうして古代の形象は、情念を宿した定型の姿をとって、亡霊よろしくルネサンス期に再来し、病気の症候学ながらに発現することになる。

だがヴァールブルグが懸念させたはずの異形の亡霊や怪物たちは、次世代の後継者たちによって、悪魔祓けよろしく切り捨てられる。著者はそう主張し、この抑圧作業の有様を遠慮なく摘出する。首謀者と目されるのは、「アイコノロジー」創始者のパノフスカ（Panofsky）、そしてロンドンの陳腐した「ウォーバーク研究所」の所長となり、創設者の『知的生涯』を書いたゴンブリクなど。いずれもヴァールブルグ同様にドイツ語圏出身のユダヤ人にして、先駆者の没後、ナチ台頭とともに英語圏に亡命を遂げた紳士たる知の巨人たち。だが、これらはそれぞれに先駆者の「名前のない学問」を、操作可能な道具に切り詰めた、と著者は断罪する。『古代の残存』は「遺産の復活」に、「情念定型」は「象徴機能」に置換される。世界大戦の危機下、創始者が自らの課した方法論的困難ゆえ蒙った病的「不安」や精神障害は、学術上の障害として除かれ、方法としての幻想の精神病理学は、『藝術と錯視の著書』より、知覚心理学に代替された。そして毒を抜かれた毒舌が英語圏の主流学会に流通して一世を風靡し、二十世紀後半の知的環境を主導してきた。

この抑圧と昇華の機構が、同時代のフロイトによる精神分析理論の彫琢と共振していることも、すでに明らかだろう。イメージのNachlebenすなわち死後の生、亡霊としての再来は、「事後性」（Nachträglichkeit）としてのトラウマ（Trauma）体験の別名だった。それだけではない。クロイツリンクでの療養期にヴァールブルグが見せた症状は、主治医だったヒンズンガーの『現代存在分析』に「観念逃走」の不可欠の症例を提供する。療養所内で一九三三年四月二二日になされた講演のおり、ヴァールブルクは北アメリカ先住民ホビの蛇儀礼に、ゲーテを感動させた《ラオコーン》像を解釈する糸口を見出す。（ヴァールブルクはホビ族を一八九六年に訪れたが、雨乞いの蛇儀礼を待たずに帰国している）。致死の危険を冒して蛇と一体化する儀礼に宿る表情形や歪曲作用を受けつつも昇華されて《ラオコーン》に転移し、症候（symptome）として発現する。そして十六世紀初頭に再発見されたこのヘレニズム期の映像の模刻に刻印（prägen）された、悲劇的情念の文化的原初性を納得させる。「原初興奮の感覚的記憶痕跡」。同様に、古代の石棺に浮彫された踊るニンフがその頭上の籠に載せる果物の供物は、ユナイットが抱くフロフェルネスの首やサロメが籠に受ける洗礼者ヨハネの生首にも変貌して、風になびくマフンの頭髪はボッティチェリリのヴィーナスの髪にも転生すれば、ペルトルド・ディシヨヴァン二の《傑刑図》では、絶望のあまりマクダラのマリアが引きこもる髪にも変容する。踊る形象は、古代の石棺に閉じ込められ、中世以来の地層に沈んで変幻

自在な庄維と置換を蒙った末、こうしてふいに化すような文化の表面意識に浮上する。凝集しては解体するイメージ群は、憑依状態の激情の振幅と亀裂とを保持したまま、時代と文化を超えて「情念定型」として浮遊し、反覆強迫（Wiederholungs-zwang）をながらに観察者に取り憑く。この観察者＝偏執症患者は、文化の地震変動に共振する地震計と化し、観念による固定から「逃走」する奔放的なイメージの誘惑に翻弄される。

名づけ得ないイメージの跳梁に幻惑され、精神の激震と断片化を経験する「人格分裂」の危機。それを代価にヴァールブルグは、精神的力動性を発現させるための余地に「遊び」を確保する化身、霊媒となる。その通路＝間隙をぬって、無意識的記憶は可塑的な形態を纏う。こうしてヴァールブルグは造形作品形成の心的機構に、自らの精神を「感情移入（Einfühlung）」、それと「即融」し、憑依される。ここですでにヴァールブルグの「文化科学」の意図は、イメージが何を「表象」しているかを探究する、パノプス系流アイコノロジーの「意味」の「謎解き」とは決を分かつている。なぜなら霊媒は無意識の過去への進行のために、心的残滓が形態へと懐胎

（Fähigkeit）の受肉（verkörperung）して生き返り（aufersichen）、生まれ変わる、無限の姿容という謎に立ち会ふのだから。この魔術はまるで、シニークスピアの「テンバスト」を思わせる、と著者は言う。その第一幕で不可視の妖精のエアリエルはアイディオンにむかひつてこう歌う。海に没した汝の父の屍の眼球は、海底の珊瑚礁のあいまいでいつ知れず真珠と化す、と。ヴァールブルグに謎を授ける「真珠探り」の姿を見る着想。一閃突飛な比喩だが、これは「シン・アレーントのヴァールター・ベンヤミン追憶文に靈感を受けて、著者が台換した台詞だった。

ヴァールブルグがベル・ウユ療養所退院後の晩年に構想した「ムネモジネ・アトラスト」は、そうした謎が形作る図像の錯覚的な可変的モンタージュ、束の間の「星座」であり、蘇生した生霊たちの記憶の集合的錯綜だ。「残存するイメージ」が難解集散のうちに描き出す「終わりなき

遊戯」は、ヴァールブルグ晩年の（定義が）形をなさぬ書翰の「思考の閃光」のなかに、「照照した」――「統合論証」と呼ばれる症例に見られる非「自」の分裂状態、「狂気」こそが、文化という抑圧＝昇華の底流に潜

んで淀み流れる、無意識的記憶の原風景へ原「現象」にほかならない。近代ヨーロッパ知性史が、秩序ある論理的理性たらんとするあまり、犠牲にするほかなかった代価を、捨て去られた残滓として浮彫りにした本書。それは、一個の「狂気の思考」の心的症候を見届けることを通して、知性の歴史が孕む病理学的ものを「重厚」に描き出す。すなわち、イメージの残滓、再来の振る舞いを解釈するヴァールブルグの姿を、そのヴァールブルグの営みがつつた機関されながら、抑圧のなかに生き残り、やがて「霊」として再来するに至った軌跡とが、異なる次元で意図的に反復されている。その二重焦点の精細な描ききつた著者の筋力（のほ）疑いなし。

現在とて、豊饒なこの著者にとつても集大成の巨著といつてよい「残存するイメージ」（原著二〇〇二）は、著者の先達に対する果敢たる決算的評定であり、イメージ解釈学における方法序説にしてその文化史構想の具体的実践であり、実証主義的な編年史に対する破産宣言であり、さらには著者個人の知的遍歴を圧縮した精神現象学でもある。その膨大な読書には木村敏の論考も含まれるが、いまや圧倒的な博識と、間然し

ない論証による雄大な筆力、対比列伝に似た簡潔な構成から巧みな補助線を引いて問題を洗ひ出す構築力は、容易に侮り難い。近年凋落を云々されるフランス知識人界にあって、ルイ・マン、ユベール・ダミッシュ、ダニエル・アラックスらを選んだ社会科学高等研究院から、次世代を代表して遜色ない書き手が出現して活躍する様子には、些か羨望も禁じえない。

その滔滔として明晰闊達な仏語原文は、しかし日本語に移すのはけっして容易ではない。難読を極める作業とはいえ、苦心の推敲により、ここまで読みやすい訳文を提供された訳者の、質量ともに尋常ならざる努力を多量にしたい。訳の細部に議論の余地は残るが、全体を通じて解釈に致命的な誤訳は見られない。むしろ疑問が生じた場合には原文に当たり、著者に直接異論をぶつけ、脱落した補助線をさらに提起して全体の星座を要約させる努力が、読者にも要請されよう。原著者は独語に

関しては永遠の初心者だと謙遜する。だが、本文中に提供された独語原文の併記が理解に裨益するところも大きい。解説を寄せられた田中純氏の名著「記憶の迷宮」（二〇〇一）は本書の欠落を補って余りある、中井久夫氏の「兆候・記憶・外傷」（二〇〇四）を本書と併読する知的愉悅は、目下とての日本語読者ならではの特権だろう。本書九五に記された「似視覚知」に出し、ボレドロー・セントーで「刻印」（一九九七）をめぐる展覧会を組織した意図も、はたまた「インファ・モデルナ」（二〇〇一）で、衣服が人体と環境との臨界に描く波紋、やがて打ち捨てられる布切れの褌が作る存在「形態」の「過渡性」に注目した理由も、おのずと見えてくる。同世代のジェイムズ・エルキンス「身体と画像」「イメージの領域」ともに一九九七「ヤリオン・カンホーニ」潜在的「イメージ」（二〇〇二）あるいは赤間啓之「デッサンする身体」（二〇〇三）との対決も、今後注目に値しよう。

また「イメージ」是が非でも（二〇〇四）は、クロード・ランスマンの「ジョア」を契機に、アウシュヴィツの表象可能性をめぐる発生した、ユダヤ教とキリスト教の擬似神学的論争を背景として生れ落ちた著作だが、四方田犬彦「映画と表象不可能性」（二〇〇三）と切り結ぶ問題意識も鮮明だ。これらの論者を一堂に集めて議論を闘わす夢の要が実現するならば、これに勝る贅沢はあるまい。

（美術史・文化交渉学／国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授）